第十九章　文の種類

文の上に於て主語又は主語の役目をする連語・節を主部と云ひ、述語又は述語の役目をする連語・節を敍述部と云ひます。述語の意味を補充する補語・客語又は其の役目をする連語・節は敍述部の一部に屬するのであります。

例へば

主部敍述部　犬走る。

主部　敍述部　洪水に流されたるはこゝの橋なり。

主部　敍述部　予は途にて家を郊外に移す友に會へり。

主部　敍述部　君子の祖先にあつきは榮を求むるためにあらず。

主部　敍述部　象は體大なり。

主部　敍述部　風が涼しい。

主部　敍述部　深切な女の子が老人を扶けた。

主部　敍述部　高祖が天下を取つたのは蕭何と張良と韓信との力だ。

主部　敍述部　垣根に赤いものの見えるのは烏瓜の熟したのだ。

主部と敍述部との關係が文法上の形式に於て唯一回成り立つか又は二

回以上成り立つかの區別に依り、又は主部と敍述部との關係が文法上の形式に於て二回以上成り立つ場合に於て、それが他の文の一部分になるか、尙同等に並立するかの區別に依つて、文を單文・複文及び重文の三つに分ちます。

單文

(一)單文と云ふのは主部と敍述部との關係が文法上の形式に於て唯一回成り立つものを云ひます。例へば

主　敍　主　敍　主　敍
花咲く。」夜漸く長し。」鶯に追はれたる雀あわただしく檐の下に隱れたり。

主　敍　主　敍　主
鳥が飛ぶ。」涼しい風がそよ〳〵と吹いて來る。」技師は土地の地理に委しい百姓を嚮導にした。

等は之を組織する成分の多い少いの差はありますけれども、何れも主部と敍述部との關係が唯一回成り立つて居るばかりだから、單文であります。

それから

主　敍
妹は家鴨の生みたる卵を雞に孵へさす。

主　敍
敎育會の選出した三名の視察員は廣島・山口・福岡の諸縣へ向つて出發した。

などは一寸見ると主部と敍述部との關係が二回成り立つて居るやうに見えます。即ち前の文は「妹は卵を雞に孵へさす。」と「家鴨の生みたる」との二回成り立ち、後の文は「三名の視察員は廣島・山口・福岡の諸縣へ向つて出發した。」と「敎育會の選出した」と二回成り立つて居るやうでありますが、「家鴨の生みたる」「敎育會の選出した」は何れも其の述語の意味を補充すべき客語を缺いて居る。即ち主部に對する完全な敍述部を有つて居ませんから、矢張連語でありまして、主部・述部の關係は他の一つしか成り立つて居りませぬ。即ち此等も單文であるのであります。

次に主語・補語・客語等に連語を併置したもの、例へば

主　敍　主　敍
生絲・茶は我が國の重要なる輸出品なり。」校長卒業生及び修業生に證書を授く。

主　敍　主
男の子も女の子も嬉しさうに遊んで居る。」村の人が野菜や炭や薪

敍
を馬や車に積み重ねる。

のやうなものは二つ以上の語や連語を引纏めて共同の述語を有たせ、又は共同して述語の意味を補充して居るのですから、亦單文に屬するのであります。凡て或成分に語や連語を併置したものは、多くは幾つかの單文を縮約したもので、之を別々に書き分けて共通の部分を補ふときには、幾つかの單文に還元することが出來るのでありますが、中には幾つかの單文を縮約したのではなくして、初から思想の形式のさうなつて居るのもあります。斯るものは固より之を還元することは出來ませぬ。例へば「太郎と次郎とは兄弟なり。」を「太郎は兄弟なり。」「次郎は兄弟なり。」と書き分けることが出來ず、「全校の生徒を源氏・平氏に分ける。」をば「全校の生徒を源氏に分ける。」「全校の生徒を平氏に分ける。」と書き分けることも出來ない類であります。

次に敍述部を併置したもの、例へば

主　植物は發育し、生長す。　敍
主　予は昨年支那に遊びて風俗・人情を視察し、彼　敍
の大官・紳商及び青年に交りたり。

主　敍　主　敍

此の形は新しくて又珍しい。」英國民は善く遊び、善く働く。

のやうなものも幾つかの敍述部を引纏めて共同の主語を有たせたので、之も亦單文に屬するのであります。敍述部の併置されたものも多くは幾つかの單文を縮約したもので、之を別々に書き分けて共通の部分を補ふときには、幾つかの單文に還元することが出來るのであります。併し敍述部を併置したのは、幾つかの動作・有樣等が一所に混じて受取られるのでありますし、別々に書き分けたのは動作又は有樣等が別々に受取られるのでありまして、二つの者の間には自ら意趣の相違した所があると云ふことは、我々の注意を要する點であるのであります。

次に附屬節で文の主要成分の役目をして居るもの、例へば

主　敍　主　敍　主　敍

月の澄みたるはすが〳〵しきものなり。」船子ども潮滿ちぬと云ふ。」

主　敍　主　敍

多くの人は己が心の愚かなるを知らず。」速かなる事矢の飛ぶが如し。」日本は人口多し。

主　敍　主　敍　主　敍

花の紅いのは椿だ。」私は途で獵師の山から歸るのに遇つた。」生徒

は皆校長の轉任するのを惜んだ。」それはお前が惡いのだ。」あの先生は學問が博い。」

の如きものは、節を含んでは居りますものの、それが主語・補語・客語・述語又は述語の一部に準じて用ゐられたので、主部と敍述部との關係は一回しか成り立ちませぬから、尙單文であります。然るに從來は主部と敍述部との關係が二回以上成り立つたものとして、次に云ふ複文と致しますのは何う云ふ譯でありませう。思ふにそれは全文として既に主部と述部との關係が成り立つて居るのに、又附屬節に於ても其の關係が成り立つて居るとしてのことでありませうが、附屬節を文の主要分として數へ乍ら、同時に之を離して主要成分の外に立つものの如く考へるのは重複であり、矛盾であります。前の例に就いて申しますれば「月の澄みたるはすが〳〵しきものなり。」「花の紅いのは椿だ。」の如きは主語の役目をして居る附屬節があつて、文が成り立つて居るのですし、「船子ども潮滿ちぬと云ふ。」「私は途で獵師が山から歸るのに遭つた。」の如きは補語の役目をして居る附屬節があり、「多くの人

は己が心の愚かなるを知らず。」「生徒は皆校長の轉任するのを惜んだ。」の如きは客語の役目をして居る附屬節があり、「速かなる事、矢の飛ぶが如し。」「それはお前が惡いのだ。」の如きは述語の一部分を作る體言の役目をする附屬節があつて、何れも主部に對する敍述部が完全になつて居るのですから、此等の附屬節を文の本系外のものとして考へる事はどうしても出來ないのであります。又「日本は人口多し。」「あの先生は學問が博い。」の如きも敍述部の役目をして居る附屬節があつて、文が成り立つて居るのですから、其の附屬節を文の本系外のものと考へることの出來ないことは矢張同樣であるのであります。既に本系外のものと考へることが出來ないと致しますれば、其の附屬節に於て、主部・敍述部の關係を求めて、之を本系の文の主部・敍述部の關係に加へることの不合理なことも自ら了解されることと思ふのであります。

其の外提示語を含む文でも、獨立語を前駈にして居る文でも、文の本系外の節を含んで、主部・述部の關係が二回以上成り立たない以上は、皆單文であるのであります。

(二)複文と云ふのは從屬節を含んで主語と述語との關係が二回以上成り立つものを云ひます。言葉を換へて申しますれば、本系の文に於て主部・敍述部の關係の求められるに加へて、傍系の從屬節に於ても其の關係の求められるものを云ふのであります。例へば

河原などには馬車の行きちがふ道だにもなし。」華やかなりしあたりも人住まぬ野原となりぬ。」我が始めて彼の人を知りし時彼の人は京都に居たり。

伯母は色の眞白な子猫を飼つて居る。」粟津は木曾義仲の戰死した所だ。」花の咲いた木の下に人が大勢集まつて居る。

は形容節を含み、

主　敍
總代は聲さわやかに答辭を朗讀したり。」夜は更けたれど、車馬の往
主　敍　副、修　主
來繁し。
主　敍　副、修　主　敍　主
反對說が起つたけれども、建議案は成立した。」私は船の影の見えな
敍　主　敍
くなるまで港にたゝずんで居ました。

は限定節を含んで、本系の文に於ても主部・敍述部を求められるのに加へて、之にも其の關係を求めることが出來ますので、複文であるのであります。

それから從屬節を含んでは居ませんが、附屬節中の準體節の修飾成分の役目をして居るものを含んだものも亦複文であります。例へば

主　敍
有明の月ばかりこそ通ひけれ、「來る人なし」の宿の庭にも。
主　敍　主　敍
（　）木の葉の散り布いたのに眠る。

重文

(三)重文と云ふのは二箇以上の並立節を含むものを申します。例へば

雨降り、風吹く。」月明に、星稀に、烏鵲南に飛ぶ。」大直は屈せるが如く、大巧は拙なるが如く、大辯は訥なるが如し。

範頼の軍勢は東の門へ向ひ、義經の軍は西の門へ向つた。」松は青く、砂は白い。」陸軍は奉天で破られ、海軍は日本海で滅された。

重文の並立節と並立節との間には接續詞を加へることがあります。例へば

人々歌を詠じ或は詩を賦す。」志堅く且望遠し。

酒もあり又肴もある。」物價も安いし、氣候も善いし、それに交通も便利だ。

文の種類の混合

以上述べた單文・複文及び重文は各、他の種類の文を含むことがあります。例へば

身體虛弱なる人の過度に勉强するは宜しからず。

牛は力が强いけれども歩むことが遲い。

は單文の附屬節が複文の形を取つて居るもの、

邪なる者の久しからずして滅び、亂れたる世の正に反るは古今の道理なり。

日本は面積が狹くて人口が多い。

は單文の附屬節が重文の形を取つて居るもの、

頻りに彼の來るを待ちたれども彼は遂に姿を見せざりき。

暇の無いのは承知して居るけれども、何うしても來て貰はなければならぬ。

は複文の從屬節が附屬節を含んだ單文の形を取つて居るもの、

花咲き、鳥啼く春の景色こそをかしけれ。

體溫も下らず、食慾も進まなければ、彼の病人はあぶなからう。

は複文の從屬節が重文の形を取つて居るもの、

言多きものは卑しめられ、語少きものは憚らる。」太郎は鳥の飛んで居るのを畫き、お花は魚の浮いて居るのを畫く。

は重文の並立節が附屬節を含んだ單文の形を取つて居るもの、

慾深き人は其の心常に貧しく、慾なき人は其の心常に富めり。

春が來ても花が咲かず、秋が過ぎても葉が落ちぬ。

は重文の並立節が複文の形を取つて居るもの、

觀光の外客は我が風光の明媚なるを見て、世界の公園の稱の空しからざるを知れり。

生徒が教室にはいつてしまふと、間もなく知事と校長とがはいつて來て、其の本を讀むのを聞いた。

は複文の本系に附屬節を含んで居るもの、

山深み都の方は霞めども、氷も解けず鳥も來鳴かず。

海邊の岩の上に立てば月も清く風も涼しい。

は複文の本系が並立節から出來て居るものであるのであります。

以上は單文・複文・重文の混合した一斑の例を示したのでありますが、此等は尙種々に延長・擴大されて、益〻紛糾の度を高くするのであります。併し如何に延長され、擴大されましても、三種の文の區別が十分頭にはいつて居りますれば、容易に其の結構を知ることが出來ますから、更にくだ〳〵しく例を擧げる必要もあるまいと思ふのであります。

＊　＊　＊　＊　＊

文章論に關しましては尙他に申し上げたいことも多くあるのでありますが、既に品詞論に附帶してお話ししておいた所もありますし、其の大體は略〻盡して居る樣に考へますから、此の講義は之を以て局を結ぶことに致します。

文語口語對照語法　終